

マチュア世代の働く女性のセカンドキャリア 地域社会へ活躍の場を移す際の課題

西村 美奈子¹、遠藤 佳代子¹

Second Career of Mature Generation Working Women Challenges in Shifting Activities to the Local Community

Minako Nishimura, Kayoko Endo

【概要】

これまで、企業で長年働き続けてきたマチュア世代（40代後半から60代）の女性たちの定年後の「セカンドキャリア」に対する意識と、企業側の自社シニア従業員に対する考え方を調査研究してきた²。昨年はさらに諸外国におけるシニアの状況を各種のデータから調査したが、本年度は視点を変えて「地域」に着目した。女性たちがセカンドキャリアとして「地域」をどう捉えているのかをアンケートと座談会で調査し、さらに地域ですでにセカンドキャリアとしての活動を開始している女性たちにインタビューを実施して、地域社会に次の活躍の場を移そうとしたときどんな課題があるのかを考察した。

1. はじめに

1.1 「シニア女性が生き生きと輝き活躍する社会」とは（アンケート調査と座談会の開催）

2020年7月1日現在、65歳以上の女性は20,411,000人で女性全体の31.8%にも及ぶ（総務省統計局2020年（令和2年）12月報、人口推計より）。シニアの女性たちが生き生きと輝き活躍する社会とはどんな社会なのか、理想とする生き方とそのためになにが必要なのかについてのアンケート調査を実施し、さらにアンケート結果を深掘りするための座談会を開催した。

1.2 「地域」についての意識調査

「地域」についての意識調査は、上述の「シニア女性が生き生きと輝き活躍する社会」に関するアンケートの設問項目の一部とし、その結果をもとにした座談会では、テーマのひとつとして「地域」について取り上げ、参加者から自由に意見を述べていただくかたちでヒヤリングした。

¹ 昭和女子大学 現代ビジネス研究所 研究員

² マチュア世代の働く女性のセカンドキャリアについての意識調査

（昭和女子大学現代ビジネス研究所 2016年度、2017年度、2018年度、2019年度紀要）

2. アンケート調査

2.1 アンケート実施概要

アンケート実施にあたっては、一般社団法人ディレクトフォース（東京都千代田区、代表：段谷芳彦）（以下 DF）³とも連携し、40代から80代の男女101人（うち女性70人）から回答を得た（男女で違いがあるのかをみるために男性にもアンケート実施）。

- 調査対象：40代から80代までの企業で働く（あるいは過去働いていた）男女
- 調査方法：WEBアンケート、原則未記名回答
- 調査期間：2020年4月末～5月半ば

年代別（女性 n=70）			現在働いているかどうか（女性 n=70）			
40代以下	12人	17%	働いている	正社員	34人	49%
50代	37人	53%		正社員	31人	44%
60代	17人	24%		以外		
70代	4人	6%	働いていない		5人	7%

表1：「シニア女性が輝く社会とは」アンケート女性回答者属性

2.2 アンケート結果

アンケートでは3つの質問について問い、性別、年代別、雇用形態等で分析を行った。

1) シニア女性の活躍する社会ではどんな生き方（将来像）をしたいと思いますか？

組織に所属されていた方（あるいは在籍中）だからか、理想のセカンドキャリアも「企業や団体で活躍する」、もしくは「社会課題解決に貢献」を希望される方が多かった。また、「起業」や「新規チャレンジ」、「若者の育成」、「プライベートの充実」も同程度にあったが、「地域に貢献」という項目は想定以上に低かった（図1）。

また、男性では圧倒的に「企業や団体で活躍する」が多く、男女差が見られた（図2）。

3. 一般社団法人ディレクトフォース

企業の上級役職退任者の団体として2002年に設立、長年の企業経験・知見を生かし、「社会貢献と研鑽」「企業支援」「交流交友」を柱に活動。現在会員数600人を超える。

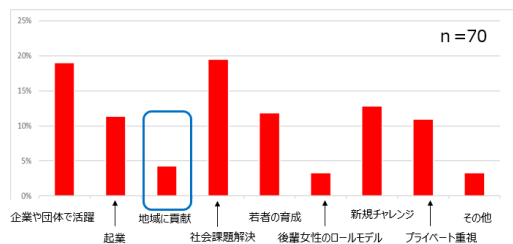


図 1：理想の生き方（将来像）

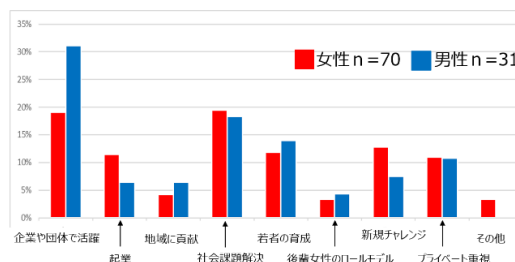


図 2：理想の生き方男女比較

2) 理想の生き方に対して現実はどうですか？（現役の方は実現できそうですか？）

理想とする生き方の実現度合いは年代別に差があった。40代は将来が見通せず不安が高く理想の実現度（の可能性）も低い方が多く、50代はもやもやしている方と既に人生を決めた方のばらつきがある。60代になると定年という区切りを迎えたせいか実現度が上がる（図 3）。さらに、正社員ではない方が、また活動している数が多いほど実現度が高い傾向となった（図 4）。

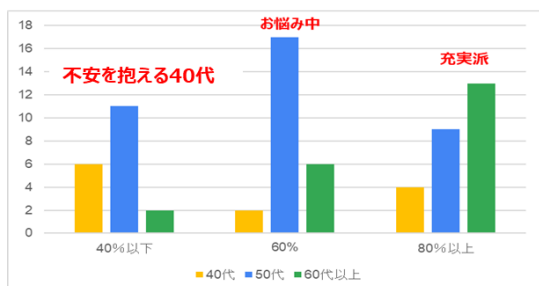


図 3：理想とする生き方の実現度合い（年代別）

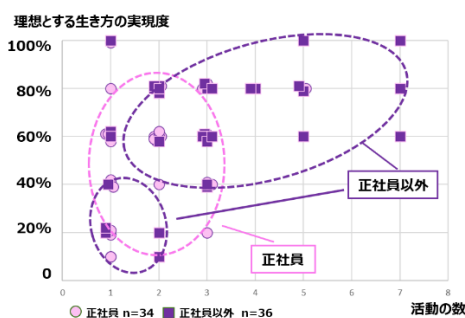


図 4：活動の幅広さと理想実現度合い

3) 理想と現実のギャップを埋めるのに必要なことは？

1) であげた理想の生き方（将来像）に対して、現実とのギャップ解消に必要なことについて質問したところ、「社会全体の理解促進」を選択された方が多かった（図 5）。これはいわゆる年齢の壁の他に、従来からの男女の壁（男性とは昇進、昇格に差があり、更にそれがセカンドキャリアに影響を及ぼしている）について示唆する内容となっている。また、「活躍の場の紹介」や「創業支援」を選択された方も多く、女性のロールモデルが少なく、女性の先輩からの仕事の紹介など男性なら当たり前にあることがまだまだ難しい状況がうかがえる。

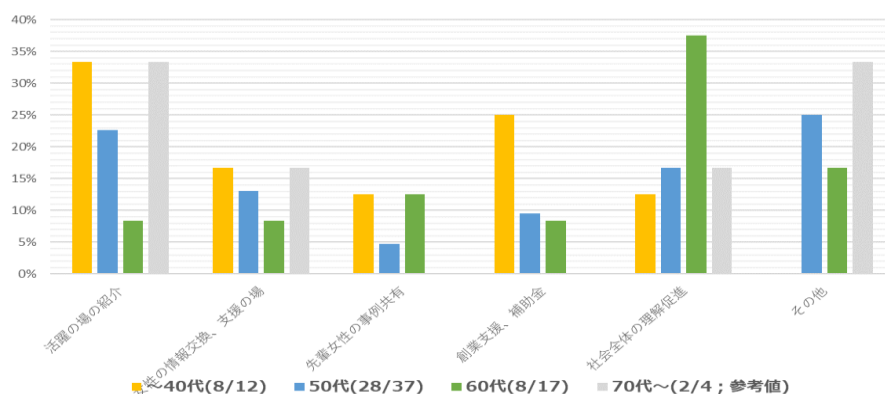


図5：理想と現実のギャップを埋めるために必要なこと（年代別）

3. 座談会

アンケートで様々なご意見やアイデアが出てきたこと、また筆者達が仮説で立てた項目以外にもコメントが多数出てきたことから、その後更なる深堀として座談会を実施した。特に「地域に貢献」は非常に少なく、何が課題なのかをヒヤリングした。

3.1 座談会実施概要

座談会参加者はアンケートで協力を申し出てくださった方たちから女性のみをピックアップし、平日夜と休日の昼間の2回を指定して参加可能な日時を選択してもらうことで、2つのグループに分け、同じ内容（テーマ）で実施した。

第1回	10月25日（日）15:00~17:00	5名
第2回	10月30日（金）20:00~22:00	8名

3.2 座談会から

座談会では主に2つの視点に絞って深堀りを行った。

1) セカンドキャリアに向けてやっておいて良かったこと

既にセカンドキャリアとして活動を長年されている方、最近新たに仕事を始められた方々に準備しておいて良かったことを伺ったところ、大きくは以下の4点があがった。

① 意識した人脈作り

現役時代に、仕事での人脈を仕事以上の付き合い（心のつながり迄意識）にすること

を意図的に行なったことが退職後の起業でのアドバイスやお客様として生きている。

② 自分の世界を広げる・自分の資質を高める

将来に向けて、各種のコミュニティに参加して社外ネットワークを広げたり、大学院や資格取得などの勉強で自分の資質を高める努力をした（その努力をしないと現状の延長線だけではギリ貧になるとのアドバイスもあった）。

③ 自分の価値観の再認識、将来を意識した準備

現役時代、起業のために経営の勉強をした。副業や仕事以外の趣味や特技を活かしてボランティア活動を開始して、次の世界につなげられる準備を行っている。

④ 貯蓄 先立つものと将来に備えて、お金は大事との認識。特に独身の方。

2) 地域での活動について

「地域に貢献」が少ない理由をヒヤリングした結果、男性同様、地元ネットワークに入りにくい、地域＝ボランティア、将来時間ができた時に、という声が多かった。

地域での活動例：

① ママ友ネットワーク

仕事と結びつけている方はおらず、あくまでも情報交換や楽しみ、今後の人脈の一つという形。

② 地域でサークル、お教室を開催

殆どがボランティアで、地域で何がしかのお金を稼ぐというのは現状では中々難しい。ただし、地域活動をする中でターゲットカスタマーのニーズ把握を行いながら、起業への準備と位置付けている方もいた。

③ 地元とのつながりが無い、地域に対して興味がなく必要性を感じていない。

ネットワークに入るきっかけもない。男性同様に抵抗がある方。

④ 町内会での役員、お祭りでのお手伝いなど、地元ならではの活動に参加

4. インタビュー調査

4.1 先輩インタビュー

企業を定年退職あるいは早期退職してセカンドキャリアを歩み始めた先輩女性へのインタビューはロールモデルの少ない女性たちにとってはたいへん参考になるものであり、筆者たち自身も多くの先輩女性の話を聞きたいと、これまで十数名の女性たちにインタビューを重ねてきた。それらの総括は別の機会にまとめたいと考えるが、今回は特に、地域へ活動の場を移した4人と、地域活動に積極的に関わっている2人の女性にお話をお聞きした。

現在	地域	現役時代の仕事と退職時の年齢
状況		
織物工房経営 N.O さん	佐渡 (故郷)	教員 (58 歳で早期退職) その後移住
義母の介護のため早期退職して生まれ育った故郷へ移住、以前から興味があった織物の趣味が発展し、2 年後に独立。織物工房主宰の仕事以外にも佐渡の広報誌の音訳ボランティアやその他の趣味を楽しんでいる。		
公的機関の非常勤 就労相談員 S.H さん	横浜 (地元)	再就職は地元の土木会社で財務経理 (61 歳まで)
出産 (39 歳) で自宅に入り 45 歳で再就職、子育て中なので地元で職を探した。定年後は公的機関でシニア向けの就労相談。70 歳でキャリアコンサルタントの資格取得。地域のコミュニティ活動では月に数回就労相談ボランティア。現在の仕事を 75 歳くらいで辞めたらその後は地域で就労相談所を自分で開設したい。		
ボランティア M.M さん	横浜 (地元)	学校法人で事務職、定年退職後再雇用 (67 歳で退職)
定年後 1 年契約の再雇用を 7 年続け、47 年間同じ職場で勤務。その後、趣味をきっかけに地元で「傾聴」のボランティア。さらに「笑いヨガ」の本格的な指導者めざして勉強中		
会社経営 H.M さん	富山 (故郷)	出版社で社史担当ライター (41 歳で独立)
30 代で子連れで U ターン。出版社で担当した社史制作の経験を活かして独立 (創業して 28 年)。仕事を通じて中小企業の経営トップとの人脈ができ、中小企業女性経営者として地元経済団体やロータリークラブでも活躍。地域で女性人材受け入れに尽力中		
会社経営と NPO 主催 A.A さん	横浜 (地元)	出版社勤務→フリーランスの編集者 (41 歳で起業)
地域情報紙のフリーランス編集者を経て、地域に雇用を生みたいと 41 歳で起業し、地域情報誌やレストランを運営。さらに地域活性化をめざして、地域の (特にシニアの) コミュニティ活動を行なう NPO を 60 歳で立ち上げ、現在両輪で活動中 (設立後約 5 年)		
個人事業主、様々な 活動に参加 Y.N さん	島根 (地域)	家庭用品メーカーで商品開発 (48 歳で早期退職)
パブリックのために働きたいと早期退職、大学研究室で事務をしながら精力的に各種ボランティア活動に参画。友人の誘いで参加したイベントをきっかけに、地方創生事業の可能性を地元自治体職員とともに企画・推進中。今はボランティアとして楽しんでいる		

表 2 : 地域で活動している先輩インタビュー

4.2 地域に入っていく際の課題（インタビューから）

「地域」に入っていくには、それなりの大変さがあるのではないかと、「地域に入っていく際に意識したこと」「地域に入っていく際の課題」についてお聞きした。

- 現役時代は、将来地域に入っていくことはまったく考えていなかった。地元の情報に興味はなく区の広報誌を見ることもなくコミュニティセンターの存在すら知らなかった。煩わしさを避け、最低限の近所付き合いだけだった。
- 地元で働く場を見つけられたら気持ちに余裕ができるが、あまり近いと煩わしさもある。電車で2駅程度、自転車で通える距離が望ましい。
- 地域へ移住後、知り合いがいなかったので地域の集まりには積極的に参加した。
- 地域移住などは目的が明確で、遣り甲斐のある事がないとやっていけない。
- 好意で幹事の仕事を申し出たところ強く拒否された。よく状況が分かってないのに出しゃばるな！ということのようで付き合いの難しさを感じた。
- すでにできているコミュニティに入るには勇気がいる。家の近所よりもある程度知らない人たちの中の方が入りやすい。退職してからすぐに地域に入るのは無理なので会社を辞める前から少しずつ準備をすべき。

（地域のコミュニティを主宰し、参加を勧誘している人の立場からの意見）

- 働く女性たちも男性と同じで地域に興味がない。地域のことを考える暇もない。せいぜいPTA活動程度に参加する程度。これは仕方無い。
- 「シニアになったら地域活動に参加する」というのは違うと思う。今、地域活動の主体は70代から80代の男性。皆さんやることないから。もっと若い事からやれば良いと思う。「やらなきゃいけない」だと楽しくないし、続かない。

やはり現役時代は地域に関心がなく地域の情報に目を向けることもなかった点、地域での密な関係性は煩わしいと避けていた点が共通する。さらに、地域のコミュニティに入っていく際には「勇気が必要」と心理的なハードルの高さも強調されていた。

一方、地域で働くことの魅力を語ってくれた方もいた。地域は都会で働く女性たちが考える以上に魅力的で、やる気さえあれば地域は受け入れ後押ししてくれる。仕事もあるので最初から敬遠せずに、自分がやってきたものを活かしていく道を探して欲しいと実際に地域で活躍されている方からは「地域」に対して好意的な意見もあった。

5. 地域セミナー参加者ヒヤリング

筆者の地元（横浜市）の NPO 主催のセミナー参加の女性たちに、定年後「地域」で働くことについて聞いた。（開催日：2020 年 11 月 21 日）

年代	人数	現在の就業状況	人数
50代	3名	現役（フルタイム）	3名
60代	3名	専業主婦（パートタイム）	1名
70代以上	3名	定年後（セカンドキャリア）	4名
		定年後（模索中）	1名

表 3：セミナーでヒヤリングした方達の属性

現役（フルタイム勤務）の女性たちからは以下のような意見が出た。

- ・地域で何ができるのか、どんな仕事、どんなニーズがあるのかわからない
- ・地域社会と交流がない
- ・子育て時期のサークルがあるので声をかければ人脈はある

一方、すでに定年後に地域で活動の「場」を見つけた 60 代、70 代からは以下のような意見があった。

- ・現役時代は仕事のウェイトが高く、地域とはまったく関わりがなかった。
- ・地域にはコミュニティ（グループ）ができあがっていて入りにくかった（孤立しがち）。
- ・自分から行動することで、なんとかコミュニティに入ることができた。
- ・地域に入っていくのには勇気と覚悟がいる。
- ・地域の中で価値観の違いを感じた。それぞれの価値観を認めることで溶け込んでいくことができる。
- ・現役時代から（地域の活動に参加するなど）意識して人脈を作ることが大事
- ・地域で仕事をするには、自分がこうしていきたいという発信力が必要

地域の NPO 主催のセミナー参加者なので、多少なりとも「地域」の情報を得ている方達だが、やはり現役の方達は地域で何かができるのかわからないと不安を示していた。地域における人脈は子育てを通しての場合が多く、独身や子供のいない、あるいは子供が成長してから引っ越した働く女性たちにとっては、地域での人脈作りは簡単ではない。また、子育て時期の人脈をどう活かしていくのかも難しい問題である。

すでに地域に何らかの活動の「場」を得た女性たちは、地域社会に入っていく困難さを、特に「孤立しない」ようにこれまでの考え方を換え、地域に溶け込んでいく勇気と覚悟、努力が必要と強調していた。先輩インタビューで出た「勇気」という言葉がここでも聞かれた。

6. まとめ

約 100 名の方たちにアンケートでお聞きした結果、働き続けてきた女性たちの「理想の将来像」は男性同様「企業や団体で活躍する」、もしくは「社会課題解決」で、これまでの経験を活かしたいという声が大半だった。「起業」「新規チャレンジ」「若者の育成」が後に続き、「プライベートの充実」も多かったが、「地域に貢献」ということを希望された方は筆者達が想定した以上に少なかった。

年齢別にみると、先が見えない 40 代は不安が高く、50 代はもやもやしている方と既に人生を決めた方とのばらつきがあり、60 代になると定年という区切りを迎えて自分なりの理想の実現度が上がる。また、活動の数が多いほど理想の実現度が高い傾向が見られた。

理想と現実のギャップを埋めるために必要なこと、やっておいて良かったことは、様々な事例があったが、まとめると「戦略的な人脈作り」「自分の世界を広げる社会活動」「自分の価値観の再認識と将来を意識した準備」そして「お金」であった。

「地域」に関して言えば、現役時代は皆、地域に関心がない。子供が小さい時は PTA や自治会活動など子供を通して地域と関わりができるが、子供がいない、あるいは子供が育った後はほとんど地域と関わりがない状態で、広報誌などの地域の情報を見ようとすらしていない働く女性が多いことがわかる。これは働く女性達が、子育て時期を除けば、ほとんど男性と同じ傾向だと言え、女性は横のコミュニティ能力が男性より高いから地域コミュニティに入るのにも苦労しないというのは現在の働く女性たちには当てはまらないという説（倉重 2015）を裏付ける。

一方で、定年後地域で活動して活躍している女性はまだまだ少数である。インタビューした方たちは現在試行錯誤しながら地域での活動を楽しまれている。これから定年を迎え、地域で活躍したいと考える方たちは、先輩たちの苦労から学び、現役時代から少しずつ地域活動に参加するなど準備が必要である。

さらに、「地域」＝「ボランティア」として、「地域では稼げない」と敬遠する傾向があるのは働いてきた女性ならではかもしれない。だが、実際に地域で活動している方達を見ると、「ボランティア」活動を最終的には有償の仕事に結びつけようとしている方もいる。

地域の活動を総括すると図 6 の 4 象限に分類されるが、セカンドキャリアとして地域を考えたとき、自分でどこを目指すのか、すぐには稼げないかもしれないが、楽しみから始めて先生になったり、ボランティア活動で人脈を広げ、ニーズの分析から事業化という可能性も大いに考えられる。

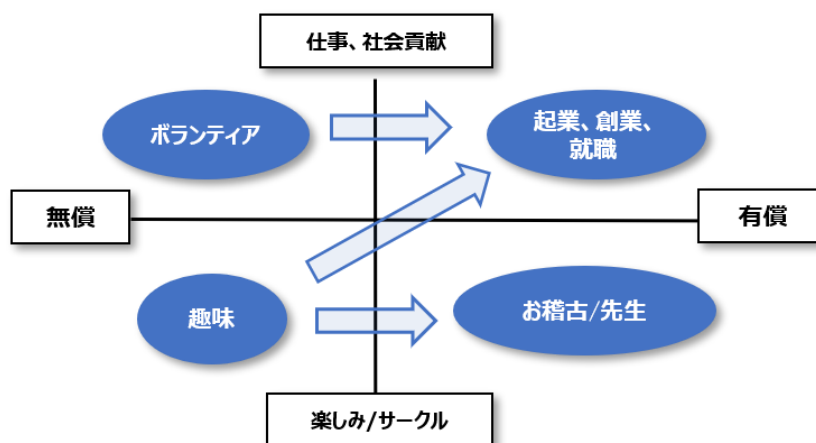


図 6：地域における活動分類

尚、今回の調査においては、「地域」と「地元」を区別していなかった。「地域」と言った際に、「出身地」や「故郷」あるいは「地方」を思い浮かべる方がいる一方で、今住んでいる「地元」を思い浮かべる方もいた。これは最初に定義すべきであった。

また、選択肢の項目を「地域に貢献」としたことで、ボランティアという印象を与えてしまったかもしれない。これを「地域で活躍」とすれば、多少違った傾向がでた可能性があることは否めない。

さらに、地域を支えている「専業主婦」の方に対するアンコンシャスバイアスがあるのではないかと当初考えたが、その点についてのヒヤリングができなかった。また、受け入れる側である「専業主婦」の方達からのヒヤリングは、ほとんどできなかった。これはまた別の機会に調査してみたい。

以上

【参考文献】

- ・秋葉大輔（2020）『ライフシフト 10 の成功例に学ぶ第 2 の人生』 文芸春秋.
- ・大江英樹（2020）『定年前、しなくていい 5 つのこと』 光文社新書.
- ・荻原博子（2019）『年金だけでも暮らせます』 PHP 新書.
- ・倉重佳代子（2015）「これからのシニア女性の社会的つながり～地域との関わり方に関する一考察～」『富士通総研（FRI） 経済研究所 研究レポート』 424.
- ・出口治明（2020）『還暦からの底力』 講談社現代新書.
- ・松田智生（編著）（2020）『明るい逆参勤交代が日本を変える』 事業構想大学院大学出版部.
- ・Joseph F. Coughlin（2019）依田光江 訳『人生 100 年時代の経済』 NTT 出版.
- ・「40 以上はやる気なし」会社のホンネと消滅するおじ社員 『日経ビジネス』 21 年 1 月.
- ・「閑中忙あり」 野村証券ネット記事 2020.7.8.
- ・「セカンドステージ（地方創生）」日経新聞夕刊 2020.4.9.
- ・「長生きという憂鬱」 『日経ビジネス』 2020.2.17.